

今年のアカデミー賞授賞式でもっともおしゃれな印象を与えた男優はといえば、胸元にフリルをあしらったドレス・シャツをのぞかせたスコットランド風タキシード姿のシヨーン・コネリーではなかったか。

フリルやレースやリボンが17世紀には男性らしさのシンボルだったこともあるとはいえず、19世紀、20世紀を通して「女のもの」という固定観念を背負ってきた。その「フェミニンな」フリルが、コネリーの「男性らしさ」を損なうどころかむしろ引き立てていたのは、誰しも認めるところであろう。

男性のフリルの「復権」が見られるのは、セレブのフォーマル・ウエアばかりではない。昨年あたりから、ふつうの男性（といってもどちらかといえばファッション好きな男性）がスーツに合わせて着るシャツにも、フリルをあしらったものが登場している。実はこのフリル・シャツを作るメーカーに取材したことがあるのだが、「性の越境を仕掛けるという意識はありますか？」というこちらの質問に対し、返ってきたのはこんな答え。「いやー、たんすにないもの、ないもの、と探したら、フリルが目に入ったんですよ。ちょうどレディスでもフリルが人気だったんで、いけるかな、と」。21世紀の作り手は性の越境などと気負う必要がないんだー、と肩透かしをくらった記憶がある。

思えば性差を侵犯することは（主に女性にとって、であるが）、ジャンヌ・ダルクの中世には死に値する罪であり、アメリカ・ブルーマーの19世紀には社会の基本前提を脅かす一大スキャンダルであった。20世紀になってようやく、ジェンダー・シンボル（と信じられてきたもの）の侵犯が、スキャンダラスであ

るからこそシックな価値をもつふるまいとして公然と認められていく。いわゆる「シック・オブ・シヨック」がファッション史を動かすようになり、なかでも性差の侵犯は「シヨック」の一つとしてきわめて効果が高かったのである。

女性服では1920年代のシャネルが展開したギャルソンヌ・ルックやパンツ・スタイル、60年代のサンローランのタキシード・ルックや70年代のアニー・ホール・ルックなど、男性服では80年代にゴルティエが展開した、ビステイエヤスカートといった女性服の要素

変容する 男らしさ「女らしさ」。

中野香織 文
text Kaori Nakano

CHANGING MASCULINE AND FEMININE



口ひげと同じく、大きなレースの衿やハフスリーブといった装飾の華美さも男らしさをアピールする要素だった17世紀の紳士と、同時代の淑女。
[A VISUAL HISTORY OF COSTUME THE SEVENTEENTH CENTURY]
(Drama Book Publishers)より。

1920年代にシャネルは、男服の着心地の上さを取り入れながらエレガントで女らしいスタイルに仕上げ、当時の新しい女性たちの支持を得た。パリ・オペラ座のダンサーで振付け師でもあったセルジュ・リシャルと。

を取り入れた「オム・オブジェ(見られる男)」スタイル。「性差を越える試み」としてファッション史に燦然と輝くこれらのスタイルは、今あらためて眺めると、アンドロジナス(両性具有的)というよりもむしろ、異性の影をちらつかせることで女性らしさあるいは男性らしさがひとときエッジ鋭く際立って見えるスタイルである。性差侵犯のスリルが、性をあいまいにするのではなく、倒錯的に性を強調する効果を発揮している、というか。

一方、1960年代以降広がるユニセックス(性の区別がない単性)ファッションは、性を感じさせない「アセクシュアル」な存在を作るもので、両性具有ファッションとはまた別な効果を生むが、この普及もまた性差の壁を低くする流れに貢献してきた。

そして今、あるのかないのかよくわからなくなつた性差の壁、これを越えてもスキヤンダルになりうるはずもなく、かつてジェンダー・シンボルの幻影をまどつていたものも、「たんすにないもの」というフラットな位置づけをされるまでになつた。

そんな時代においては「男らしさ」「女らしさ」というものも、20世紀までのようにセクシュアリティに直結するような湿つたものではぜんぜんなく、たんすから出し入れ可能な記号的要素になりつつある。今年の秋冬コレクションに多く見られる「レディライク」ないし「フレッシュ・クチュール」、および「ハリウッド・グラマー」と形容される女性服がまさにそつだ。レトロな女っぽさを強調しているように見えて、その実、「女度200%、なんちゃって」というカラリとしたお遊び感を漂わせているのではないかとリわけガリアーノにそれは濃い。リリしい女らしさを前面に出す「ダンディ・フェミニン」ないし「マ

スキュリン・フェミニン」にしても、かつての「男性服の要素を取り入れることで女らしさを引き立てる」というセクシュアリティ直結型とは明らかに雰囲気を変にする。性差がいったんフラットになつたその上から、パズルのように構築された「男度40%プラス女度60%」のゲーム感覚の「女らしさ」を遊んでいる感じ。

コレクションで発表される服ばかりではなく、ふつうの女の子が着る服においても同様のことが言えそつだ。今年久々にワンピースドレスがブレイクしつつかあるという現象、および肌の露出が年々エスカレートしているという現象は、けつして古い意味での「女らしさ」の復活を意味しないし、性的誘惑の意図とも(ほぼ)無関係である。どちらかといえば「たんすにないもの」としての、ちよつと目新しく、取り替え可能な記号としての「女っぽさ」がウケているように見える。(これに飽きるとワンピースドレスの下にズボンをはいて「はにわ」的無性ごっこを楽しんだりもできるし)

そんな「らしさ」が新しい「ごっこ」局面に突入したかに見える時代においても、19世紀的な性差の壁を頑として守っている服もまた健在で、それがいわゆるおやし系ビジネススーツである。こちらのほうは、フリルシャツの登場などにはもちろん目もくれず、夏の暑さも首もとの苦しさもともせず、ひたすら大人の男の「慣習」をストイックに死守し続けている。とはいへ、「袖口から10ミリのカフスを覗かせよ」とか「スポンの裾線の高低差は18ミリに」などというミリ単位の厳しい「暗黙のルール」が増えてくると、これにこれに「大人の男のダンディズムごっこ」にも見えてくるのであるが。



1950-60年代のアメリカンスタイルを体現するジャック・ニコルソンとティンティン・トーマス。左は、スクートをはく男。宮廷風ロマンティズムをテーマにした'85-'86秋冬メンズコレクションより。右は、同じシーズンのレディズコレクションより。



1980年代にジャンポール・ゴルチエは、女物の要素を取り入れたメンズスタイルを展開。左は、スクートをはく男。宮廷風ロマンティズムをテーマにした'85-'86秋冬メンズコレクションより。右は、同じシーズンのレディズコレクションより。